

弁護士に求める風情

女優、演出家、劇作家、劇団リリパットアーミーII座長

わかぎふさん



—— わかぎさんは、劇作家・女優としても活動されていますが、弁護士をテーマにした作品はありますか。

「罪と、罪なき罪」という、津田三蔵を題材にしたお芝居を書いたことがあります。

明治時代にロシアの皇太子が日本に来ていて警備をしていた巡査の津田三蔵がロシアの皇太子に切りつけたという事件（編集注：大津事件）について、明治天皇も含め、当然死刑にするべきだという意見が世の中の風潮だったんですが、児島惟謙という現在でいう最高裁長官の方が、いや何かおかしいということで、弁護士にもちゃんと裁判しようじゃないかと掛け合って、結局死刑にはならなかったという話です。

—— 作品を作るにあたって、テーマの選び方で意識していることはありますか。

例えば去年書いた「ひとり、独りの遊戯」というお芝居のときは、最も劇的な人生を送る人というのはどんな人だろうと思って、それは人生で男と女を半分ずつ生きた人じゃないかなと。80歳で人生を組むとしたら、40年間男で40年間女だった人の話を書いてみよう。

弁護士のお話を書いたときも、いわゆる圧政に潰されて本当にやりたい仕事ができない人のお話と、裁判官の家で女中をやっていたためにいわゆる教養が身につけてしまったばかりに大変な事件にかかわっていく女性、明治の全く教育を受けられない女の子が急に

教養ができてしまったばかりに自殺してしまわなければならないんですが、それでよかったのか悪かったのか、そこをいつも考えるんです。

—— 芝居は1回きりで、何度も見られるテレビドラマや映画とは違うのですが、その点はいかがですか。

私、生じゃないと嫌なんです。生でないと、人間が笑うとかいうことが絶対伝わらないと思っているんです。テレビとかだと制約がかかっちゃって、例えばこの間のお芝居だったら、大杉栄という殺された社会主義者の娘の話で、娘は3人出てきます。一番上は魔子、次がエマ、次がルイズという女の子で、それが3人とも同じおっぱいのかぶり物をかぶって同じ格好をしています。そ

して、一番上の女の子はそのときまだ6歳なんです。それをコング桑田という175センチで100キロのオヤジがやってたんです。変な話だけど、舞台というのは表現として誇張していくものなので、あとが168センチの大井靖彦という男の役者で、次が145センチの小椋あずきという役者でした。大きいのと中間のと小さいので同じかぶり物のかつらをかぶせて、それが黒い幕からびょこんと出てくるという演出です。

これは、社会主義者の娘が同じ格好で、しかも洋風の格好をさせられていて、ちょっとハイカラだったんだという表現ですけど、これをテレビでやると本当に6歳と4歳と2歳の女の子でないとだめなんですよね。

映像というのは「超現実」なので、現実的にあったんだということにしていかなきゃいけない。庭の木1本だってきれいにしなきゃいけないんですけど、舞台というのは「超表現」なので、どこを誇張させてどこを印象的に

させて、どこで人間がおもしろいと感じるか、それは生であるかどうかなので、そのことにおいては私は生っぽいほうが好きなんです。

テレビの脚本も書きますし、アニメの「リトル・チャロ」みたいな脚本も書きますけれども、そのときは完全に頭は切りかわっていますね。

音楽だってレコードで聞くよりやっぱりライブで聞いたほうが好きです。生で歌ってるんだとか、生でやってるんだと。

その最たるものがスポーツで、私の演出の最もお手本にしているのはラグビーとサッカーの監督です。彼らがやっていることが演出にとっても参考になります。私はほかの人の演出を全くあてにしていなくて。

—— ラグビーやサッカーの監督は、指揮官としてプレーヤーをある程度動かすけれども、裁量があるみたいなの。

そう。どれぐらいの作戦を立てていて、どれぐらい信用していて、どれぐ

らい予測しているかということがすごい勉強になります。手倉森監督は私にとって今すごくいいお手本です。イビチャ・オシムも私にとってはすごい先生でした。

—— 話は変わりますが、裁判所で傍聴された経験はありますか。

私、昔、中央大学の法学部の男の子と同棲してたんですね。その子とのデートはいつも裁判傍聴でした。東京で。

まだ3回生だったんで、デートといえば必ず傍聴でしたね。おもしろかったです。弁護士さんもないのに自分で全部調べてきて自分の弁護をするおじいちゃんとか、そういう人を見ながら「へーっ」とか言いながら。あと、離婚系とかも多いからおもしろく拝聴しました。

—— 変わったデートですね。

でも、こんな簡単に入れちゃうんだと思って。何となくテレビのイメージで、人気のあるのはすごい並んでいて、ああいうことをしている人はみんな関



係者が何かなんだらうなと勝手なイメージだったので、彼が「裁判聞きに行こうぜ」と言ったときに、「裁判?の映画?」ぐらい分からなかったです。

—— わかぎさんは、弁護士に対してどういうイメージをもたれていますか。

弁護士さんって割と世間知らずな人が多いなと思います。

例えばお店に入って一緒にご飯を食べると、最下層の人の金銭感覚とかが余り分からないんだなと。弁護士という職業柄すごく知ってらっしゃるんだらうなとこっちは勝手にフィルターをかけているところもあって、やっぱりこの人らってボンボンなんやなと思うことがよくあります。人間って食べ方とか食べ物の趣味、あと着ているものとかで大体金銭感覚が分かるじゃないですか。それが我々演劇人よりはるかに上だなと。それは別に弁護士さんに限らず新聞記者さんとかもそうですが、この人たちは一番最下層の人たちの生活ってリアルじゃないんだなと思うことが多くあります。

—— 弁護士に対する要望があれば。

私は、弁護士の数が何となく少ないなとまだ思っています。弁護士って身近にそんなにいないじゃないですか。

もう何十年の知り合いなんですけど、私にとって「いい弁護士」がいるんです。ある日、知り合いのバーのマスターが倒れたと私に電話がかかってきたんです。倒れているのを見つけた方が救急車を呼んで救急搬送されて、そこに警察が来て身内に連絡をしなきゃいけないけど、九州の人なのでこっちに身内が1人もいないというときに、彼の年賀状が置いてあったのでまず彼に連絡が行ったんです。

そこで、彼は「とにかくあらゆる手を尽くしてご家族に連絡したほうがいい状況みたいなので、まず今日僕が病院に行って」などと、その場を全部仕切ってくれたんです。

「この人、何でこんなに頑張ってるん

だろう」と思ったんですが、彼は人道的にやらなきゃいけないと思っていたみたいで、何だろう、ああいう行動が全ての弁護士の人に感じられるようになってほしい。

彼はふだんは派手なアロハシャツ着て、嫁はんと行った食べ物をフェイスブックに上げていたりするんですが、でもいざとなったらこの人すごい頼りになるんだなと思って、改めて彼をすごい見直しました。

弁護士さんは何となく風情がそんな人であってほしいな、スーパーマンであってほしい。「いざというときは着変えられるじゃん」とか思っています。

(Interviewer: 蝶野弘治)
(Photo: 高廣信之)



玉造小劇場 配給芝居 Vol. 21

おもてなし

非公開 わかぎふ

田嶋 みやなおこ
うえだひろし
江口直彌
浅野彰一
江戸川萬時
コング桑田
鈴木健介
久野麻子
森崎正弘
内山純貴
長橋遼也
わかぎふ
八代進一
福本伸一
茂山逸平

TOKYO 2017年5月12日~14日 全労済スペース・ゼロ
OSAKA 2017年5月23日~28日 ABCホール

詳細は、玉造小劇場HPにて逐日発表!
<http://tama-show.jpn.org/>